

「学びと育ちを保障する学校・教師」

心理臨床の立場から

田中千穂子

今学校で困っている3つの大きな問題：子どもの虐待・親のうつ・発達障害

今回は、そのなかの発達障害をめぐる誤解に焦点をあてたい

○今世の中に広まっている「発達障害」の捉え方は、その全容がすでに解明され、確定したものであり、もってうまれた固定的なものである、という考えである。

↓

この考えの背景にあるのは、脳に何かしら器質的な問題があるという考え

○現代の脳科学

黒田（2008）：ヒトの脳機能や行動のすべては、対応する神経回路の活動による。

脳の発達の中で、複雑に形成される脳の神経回路がうまくできないということが発達障害をもつ人の脳において生じており、そのために特定の行動がうまくできないという事態が起こる。

発達障害は神経回路の形成、発達の局所的な違いによるものであり、神経回路のつくりの違いであるなら、発達障害をもつ人と発達障害をもたない人の行動のかたよりには、連続性がある

→つまり、発達障害がある人、ない人という2分割は不適切である

発達のかたよりはグラデーション。誰でも発達のかたよりをもっている

○岡野（2006）：私たち人間のこころは、脳という物質的な基盤をもっている。脳を理解することは、その人のこころを理解し、共感することにつながる。両者の関連性のなかでこころの問題を捉えていくことが必要……しかし同時に、脳という組織は途方もなく複雑で、その構造の一部を知ればしるほど奥行きが深まる宇宙のような存在であり、脳の動きは究極的には知りえない、予測できないという謙虚さを私たちがもつことが必要。

文献

黒田洋一郎（2008）発達障害の子どもの脳の違いとその原因 科学 78(4) 451—457

岡野憲一郎（2006）脳科学と心の臨床 岩崎学術出版社

○発達の課題：基本的には誰にでもあるもの

- ・そのなかの中核的なものが現在、発達障害という名称でよばれている
- ・ゆえに、人のこころの問題への手あてについて考える際には、発達の視点もふくめて捉えるという視点が必要になっている。

○発達障害という名称でくくられる発達のかたよりやでこぼこがあることによって生じるさまざまな問題は、人の成長過程と不可分の関係にあり、さまざまな年齢のさまざまな場面で潜伏したり、顕在化したりする。

(小学校にあがることでトラブルが起こり、障害ではないかという疑問がもたれて相談機関を受診する場合が多い)。

発達の相対的な遅れであり、歩みがとまっているわけではない
異常や病理現象ではなく、ゆっくりながらも成長してゆくもの
だから「治る」という表現が適切ではない

↓ 本人のなかで何とか対応できる力を育てること
—障害という名称は果して適切なのか?— No

○現在発達障害という名称でくくられているものは、ひとことでいうなら、その人のある部分、もしくは複数の部分に極端なかたよりのある、たとえばある部分が鋭すぎたり鈍すぎたり、ある部分が年齢よりも未発達だったり、年齢以上に発達していたりというように、その個人のなかにあるさまざまな要素の発達が、それぞれに過剰だったり過少だったりという質や量に大きなアンバランスさをもっており、そのためにその人が自分自身と関わったり、他者と関わるうえで、生きにくさをもたらすもの、ということである。個体内にある総体性とバランスの問題が、社会との関係性のなかで顕在化している。

○「あなたは発達障害だ」は関係を閉ざすメッセージ

・思いこみの罫

自分があるまなざしで人を見るから、そう見えるようになる

自閉症の子どもとの関わりから・・・小沢(1984/2007)

自分たちがもつ偏見の自覚

・関係性のなかで障害も症状も発達する

小林(2005):一次障害もまた関係性のなかで発達するという視点

↓

障害を固定したものと捉えない

☆まだ「よくわかっていない」ものを、わかったものとして親子に押しつけている

○さまざまな問題点

- ・自分が「ふつう」からはみだす怖れ、「明るく元気で活発な子」を求めるおとな
- ・忙しさのあまり、私たちは自由で柔軟にありのままに子どもを見るまなざしを喪失してはいないか・・・選別・偏見・差別
- ・発達障害のある子を早急にピックアップし、トレーニングに問題解決をめざすなかで心理臨床においても教育においても、人と人がこころをかわしながら、こころを育てていく過程が軽視されている・・・関係性という視点の喪失

文献:

田中千穂子編著(2009年7月10日刊行)

「発達障害の理解と対応—心理臨床の視点から」金子書房

小林隆児(2005) 発達障害における発達について考える そだちの科学 5号 2-8

小澤勲(2007) 自閉症とは何か 洋泉社(初版1984)